

るだけです。戦争に行つたものは皆そう思つております。だんだんと私達老齡者は少なくなり、この心を伝える人も間もなく皆無となることでしょう。そこで今、私たちは平和のありがたさを叫び、戦争の非を声を大にして伝えなくてはならないと思う次第です。

大東亜戦争出征記

— 中支と南支 —

愛媛県 河野 昇

私は大正七年二月二日生まれの召集兵です。昭和十八年九月十六日、香川県丸亀市の歩兵連隊へ教育召集で入隊し、三カ月の教育の後、一応召集解除され帰宅しました。その召集解除の折言われたことは、「お前たちは一度帰してやるが、一年以内には必ず再び召集があるから、身体を鍛えておけ」ということでした。

その当時の私の家庭は、父、母、私、私の妻、長男（三歳）、弟、妹の七人家族で、農業を営んでおりまし

た。農地は約二町歩で米作をし、養蚕（年三回）もやり忙しい生活でした。父はその外、田畑の仲介もやっていました。私が家業から離れて兵役につくことは、家計の上でも苦しいことでした。

約半年後、今度は高知市の歩兵連隊への召集が来ました。召集兵としての教育訓練の後、昭和十九年八月列車輸送で坂出へ、中支の鯨第二三四連隊へと旅立ちました。高知市朝倉の駅で父が三歳の孫（私の長男）を背負い、私の妻と一緒に竹の先に丸くて長い筒状の提灯に火をつけたのをかざして、駅前の混雑の中を見送ってくれました。父、妻、子と目と目で別れ、車中の人となりました。

随分昔のことですが、はっきりと覚えています。残念にも、父も妻も既に死別しました。その悲しみは如何とも仕様がありません。

昭和十九年八月の私共の鯨第二三四連隊は支那湖南省衡陽攻撃中でした。私共補充兵は坂出より衡陽までの行程に実に二カ月もかかりました。理由の第一は昼

は米支軍の我が物顔の攻撃を避けて隠れ、夜間行軍のみマンマンデー前進です。補充要員は軍隊教育もろくに受けていない高年齢の兵達です。長途の追及では途中ほとんどの者が栄養失調にかかり、戦いなれた古兵達も、叱る前に憐れさが先に立ったとのこと。戎衣じゆいはポロポロで垢にまみれ、見るも無残な姿でしたが、しばらくの休養で生気を取り戻しました。

ちやうど幸運にも、我々が到着の寸前に戦史に残る衡陽死闘大激戦は、予想外の日時と兵力の損耗を強いられました。支那軍の敗退、日本軍の完全勝利となりました。そして我々追及部隊は衡陽西方の両路口付近において、次期作戦の準備のため集結中に到着したのでした。もし攻防戦の最中であつたら、新着の補充要員も苦戦の連続の真っ只中に投入され、さぞかし多大の損害を出したと思われます。

灼熱の大陸にもようやく秋色を思わせる微風を感じる頃となりました。夕日に映えるスキに故郷を偲ぶつつ出勤、準備の出来た連隊は行動開始。果てしない大陸を奥地へと戦は続く。洪橋西北方地区での遭遇戦

となりました。

前衛の一部は駅に連なる高地へ前進します。高さ一五〇メートルくらいのはげ山高地ですが、その前進はヨタヨタしていました。そのはず、連日の猛暑と二晩もの間一睡もしていないのですから。猛烈な手榴弾戦となり、一山一高地ずつ制圧、敵主力は西方単公路上に敗走しました。

やがて強く記憶に残るあの「新寧の山越え」となります。従軍の全期間を振り返ってみて、最も苦しいと思った第二次湘桂作戦中の新寧の山越え。この山は、湖南、広西両省の省境の山脈で、南から西に峨々たる連峰が続ぎ、上の方は雲の中で、多分二〇〇メートル以上と思われます。山越えに備えて塩の手配を指示されましたが、山の中の現地ではメイファーズ（不可能）。山の道とはいえ全くのケモノ道。上を見ると先行隊が頭の上の稜線を、右に左に胸突き八丁の急坂をよじ登って行きます。まさに九十九折で、曲がり角は鋭角、馬は荷を積んだままでは曲がり切れませぬ。乗馬者も皆下馬して徒歩になります。馬を一頭ずつ引き

上げ押し上げねばならない難所も多く、左は千仞の谷、右は覆い被さるような岩壁で、駄馬は荷がつかえて通れません。やむを得ず荷を降ろして馬を通し、荷は人力で運び上げてまた馬に載せることの繰り返しで、何頭かの馬は谷へ落ち、兵が必死で砲や弾薬を引き上げました。その辛苦はとても言葉では言い尽くせないものでした。

一日中山登りして、やっと峠に出ると前方遙かにまた高い山です。「やれやれ、どこまで続く山道ぞ!」「こりゃ、ヒマラヤまで続いとるぞ!」と。

これに加えて食料といえ、塩なしの南瓜の水炊きのみ。体も頑張りがききません。気力も衰え始めます。人家もなく雨の降る夜は、行軍する縦隊のまま雨に打たれ、岩にもたれて眠るしかありません。時に爆発音がします。ついて行けなくなった補充兵の自決でしょう。歴戦の古参兵でも苦しいのに無理ありません。故郷で無事帰りを待っている家族を思い、ただもう痛恨の極みでした。

駄馬は次第に減ってゆきます。砲や弾薬の臂力搬送

を余儀なくされます。重火器部隊の宿命とはいえ、誠によくやったもの。"なせばなる"です。この時「河野やります!」と名乗り出て九〇キロの砲身を肩にして半日登り歩きました。皆日をむいたことを覚えていきます。こんなことのためか一選抜上等兵になり、終わりに軍衣の右腕に赤い山形を七本つけました。連隊広しと言えど、私一人の名誉でした。そのうちに中隊長、小隊長の当番兵を歴任し、小銃は持ちませんでした。これが私の福の神になったのです。小銃を持った戦友は全員戦死しました。

苦しい山越えを終わり、ホッとする間もなく全県付近にコレラ患者が大発生しました。第二大隊副官の山本中尉(歩兵砲中隊出身の一人であった)も帰らぬ人となりました。

戦場での思い出を若干述べます。まず敵の空襲を受けた時、「キーン」「ヒューン」という投下爆音は、頭の中を掻き回すようで「もう爆発か」「今か」と腹の底に力を入れて爆発を待つ気分は、実に耐え難いもの

でした。

夜、クリークの水で飯盒炊きをして、朝、湖面に屍体が幾つも浮いているのを知り、この水で炊飯をしたのかと肌に粟の生ずるのを覚えました。しかし、その飯をそのまま、私一人だけでなく全員、何回も食べました。

桂林では七星巖要塞という巨大な難関を突破し、軍司令官感状に輝いたことが、トップニュースです。私も歩兵砲隊員として、七星巖に、はたまた桂林城攻略戦にと参加出来ましたこと、帝国軍人の本懐として光栄に感じています。

歩兵第二三四連隊第一中隊は決死隊となり、MG中隊、歩兵砲中隊、工兵、山砲兵の協同作戦の下、敵前の戦車壕、地雷原、鉄條網その他障害物のあと、縦に深い陣地を、火焰放射器、肉弾三勇士に劣らぬ爆薬筒その他特攻兵器を揃え、壮烈鬼神も泣かす決死隊の攻撃を敢行し、日の丸を岩上高く翻しました。この戦闘では同郷の高橋進さんが決死隊の一員として参加さ

れ、負傷されたことを後で聞きました。七星巖攻略戦の模様は既刊の『平和の礎』に高橋進さんの聞き取り調査の項に詳述されていますので詳しい戦闘の様子は略します。

桂林作戦の大成功により、大本営では次の如く発表されました。

「大本営発表

昭和十九年十一月十一日、十七時三十分

大元帥陛下には大本営幕僚長を召され、中南支方面に作戦せる将兵の目的達成を深く嘉尚されました」

その後の、南部粵漢線打通作戦においては、在支古豪精銳の各兵团中より、特に第四〇師団鯨兵团に下命あり、「困苦欠乏に耐え、かつ戦闘経験の豊かな勇猛兵团」として起用されました。隠密潜行挺進作戦をもって見事任務を達成、先の桂林に続き重ねて軍司令官感状授与の栄に浴しました。我が連隊の武勲ますます赫々として、支那戦線に勇名をほしいますにしました。

爾後の作戦、戦闘にも私は歩兵砲隊員として従軍、

予期もしなかった終戦の大詔を拝して茫然自失、軍旗奉焼、武装解除、南京城内のどぶ清掃等を経て上海より博多へ無事生還、尾道今治經由西条駅へ昭和二十一年五月三十一日着。復員完結です。

戦後、土地改良区理事長を十四年間連続歴任し、後進に道を譲り引退しました。子供、孫、曾孫に賑やかに取り巻かれての老境です。残念なことは、出征中、方ならぬ苦勞をかけた愛妻を癌で失ったことです。これも人生の無常と朝夕妻と英霊のご冥福をお祈りする合掌の毎日です。年齢もいつしか八十歳となり、腰痛の身を医者通いしております。

老齢病弱に負けず、気持ちは一選抜上等兵、七本の赤い山形の昔を忘れず、これからも家族、地域社会、祖国日本のため、一身を捧げ尽くす気持ちでいっばい입니다。これが支那大陸に血を流した戦友の英霊に対する生き残った者の責任ではないでしょうか。

【解 説】

河野氏の体験した七星巖陣地の攻撃について、第四十師団の戦記である「鯨波」による戦闘の様様を参考として戦場の様様を要約すると、次のように激戦が展開されていた。

「昭和十九年十一月四日。午後十一時三十分湘桂作戦における最大の規模で戦われた桂林城攻撃のなかで最も難関と言われた七星巖夜襲が始まるうとしていた。

それより前、十月三十日から五日間、七星巖を眼前にして攻撃方法・戦術が研究され続けていただけに、決死の攻撃隊、歩兵第二三四連隊第一大隊第一中隊の第一線は土を這いながら重慶軍陣地まで二五〇メートルに近寄っていた。戦車壕を境として第一中隊が散開し、配属されていた師団工兵隊の第二小隊が火焰放射器二台を装備して中隊の指揮下に入った。

明ければ四日午前中、地雷表示材料、戦車壕用梯子、鉄条網鉄み、同破壊筒、爆薬、トーチカ用爆薬

などの器材の準備が整然としかもきびきびと行われている。

歩兵突撃隊古川小隊（三〇人）を先頭に、工兵肉薄攻撃隊真砂小隊（三〇人）、柴田中隊長及び指揮班、続いて歩兵第二小隊、第三小隊である。大隊長鈴木竹夫大尉の訓示と激励を受ける。

折から冷雨蕭々として、薄暮を過ぎた七星巖は黒く横たわり不気味に見える。七星巖の西南側の月牙山は歩兵第二三五連隊が攻め、既に交戦を開始したため、七星巖も防戦を開始し、至近弾、迫撃砲弾が集中し始める。これによって「突進合図」の信号弾が上がり「擲弾筒前へ」と第一中隊の決死隊が工兵支援により突撃にかかった。

この七星巖の攻撃は、この夜から八日朝まで五晩六日の血戦苦闘であった。鈴木大隊は七日朝には七星巖の頂上を攻略し、次いでB洞窟の入口を封鎖して攻撃を続行、夕刻には七星巖の高地を完全に奪取した。」

師団長宮川中將は、七星巖攻略の進展に伴い、逐次

桂江渡河のための諸準備を進めることとなる。

中支 槍兵団の戦闘

山口県 山本 哲 男

私は昭和十八年二月一日、現役兵として山口歩兵四十二連隊補充隊に入隊しました。入営時の私の家庭は、父は既に亡くなっており、母と二人で一町歩の水田農家でしたが、叔父が満州新京で駅前ホテルを経営していて、この叔父の勧めで、満鉄用地の払い下げを受け、満人・朝鮮人を雇い、柳井の水田と共に満州で農場経営を始め、内地と満州を往復しつつ農業を経営していました。

私達は入営と同時に中支槍部隊要員として現地教育を受けることとなり、二月十三日、山口を出発しました。山口を出発してからどこから連絡があったのか、母が小郡駅に酒を持って面会にきてくれておりました。母と二人の生活でしたので心の残る訣別でした。